事故を未然に防ぐための安全対策

1 企画段階における安全対策

企画段階においては、目的を明確化するとともに、安全に対する意識をもって、日程、プログラム内容、対象者、指導体制、用具・装備、緊急時対応などについて検討する。 天候や交通事情などによる突発的な計画変更にも対応できるよう、複数のプログラムを用意する など、活動に無理が生じないような計画を立案する。

2 事前準備段階における安全対策

（1） 事前の下見は、参加するスタッフが行い、次の内容を確認する。活動場所や危険箇所などの 写真、ビデオ撮影も行う。

①安全な場所の選定 活動場所が、目的や活動内容に合致しているか、予定している参加者（年齢、体力、運動 能力など）に合うものかどうかを見極めて、場所の選定をする。

②危険な箇所は参加者の目線を意識して、複数で危険箇所のチェックを行う。 危険箇所に加えて、当日の活動範囲や監視体制、荒天時の緊急 避難場所や避難ルートもあわせてチェックしておく。

③万が一のために、活動場所周辺の病院や消防署などの連絡 先を把握しておく。同時に、連絡方法、運搬手段、活動場所からの所要時間をチェックする。

（2）下見を踏まえて計画の見直しを行うことで、企画段階では気づかなかった危険箇所や、必要な安全対策（指導体制・ 組織、用具・装備など）が出てくる場合は計画変更を検討する。

（3）参加者が少人数の場合でも、スタッフは２人以上が原則である。また、事業の実施にあたっては、スタッフの役割分担を明確にする。なお、事業主催者は常に現地本部と連絡をとれるよう、連絡体制を整えておく。

（4）参加者および保護者に対する説明

参加者が子どもの場合は、保護者に対しても説明を行う。 事前説明では、活動の目的・内容、持ち物・服装、指導体制、指導責任などについて、参加者および保護者に説明を行う。

①参加者への説明（安全教育として）

ア）ルール・マナーの遵守 法律や集団の規範・約束事、そして道具の扱いに至るまで、安全を確保し快適に活動するためのルールやマナーなどについても、参加者が遵守するよう徹底する。

イ）外出での活動の多くは、非日常的な環境の中で行われるものである。従って、日常的に予想される危険とはかなり異なる。指導者・スタッフが作成した危険箇所の一覧をもとに、参加者の安全に対する意識が高まるように指導する。

ウ）自己責任の意識づけ「自分の身の安全は自分で守る」という意識をもつことは、子どもであっても非常に大切である。参加者のレベルや発育発達段階にあわせて意識を促す。

②保護者への説明

ア）安全に対する意識づけのために、保護者に活動場所や内容を知らせる際、各家庭においても子どもに対して、危険箇所などを意識し安全に十分気をつけて参加するよう言い聞かせることを依頼する。

イ） 保護者には、活動の趣旨、内容などを理解し同意した上で、子どもを参加させる責任があることを説明する。なお、保護者は子どもの参加に際して、子どもの持病やアレルギー等、配慮すべき情報や参加当日の健康状態などを報告する必要があることを説明する。

（５）参加者の情報および特徴の把握（個人調査票の作成）

①行事内容によっては参加者の情報の把握として、 参加申込書、同意書、健康調査書、子どもの場合、持病や食事制限、アレルギーや常用している薬などについても情報を把握しておく。

②参加者の特徴の把握

ア） 参加者の体力・能力 自然体験活動では、実際に身体を動かす活動が含まれるため、参加者の基礎的な体力や運 動能力、活動技術レベルについて確認が必要な場合がある。体力・運動能力に関しては、参加者のレベルに応じた無理のない計画を立て、実施場面では、弱者に合わせて行動すること が大原則である。また、参加者の中に特に配慮が必要な人がいる場合、十分な対応ができる 準備（スタッフ、用具など）をしておく。

イ） 参加者の行動・態度 集団活動を進める場合には、ルールやマナーを守ることが重要である。ルールや公正さを 無視した行動や、自分勝手などの逸脱行動は、事故やトラブルに発展する恐れがあることを 認識しておく。

ウ） 参加者の意識・感情 参加者の不安や悩み、緊張などの意識や感情がずっと解けなかったり、仲間との関わりを避けるような様子が見受けられるときなどは、細心の注意を払う。

（６）スタッフに対する指導

①役割分担とコミュニケーションについて組織として十分に機能するためにまず心がけなければならない。ミーティングなどを通じて、役割分担を明確にしコミュニケーションが十分とれるようにしておく。

②危険に対する意識づけのため 自然体験活動中に想定される危険には次のようなものがあることを知る。

・熱中症や日射病が原因（高温度、直射日光など）・動植物が原因（ヘビ、ハチ、ウルシ、毒草・毒キノコ、ダニ、など）

・気象条件が原因（天候の急変、落雷、台風、洪水、吹雪、雪崩、地震など）

・地理的条件が原因（転落、落石、急斜面、岩場、尾根、山頂など）

・水が及ぼす影響が原因（水温、水深、水流、潮流、低体温など）

・活動技術が原因（溺れる、迷う、転ぶ、落ちる、挫くなど）

・用具の操作技術が原因（切り傷、やけど、刺し傷、爆発、 一酸化炭素中毒など）

・疲労や心的要因が原因（判断ミス、パニック、過度の興奮、 疲労凍死、低体温など）

・健康状態と衛生管理が原因（発熱、下痢、食中毒など）

このほかにも、想定できる限りのあらゆる危険についてスタッフの中で出し合い、一覧にする必要がある。それをもとに、スタッフの危険に対する意識が高まるように指導する。

③危険箇所の確認として下見で撮影した写真やビデオを利用するなど、スタッフ全員が危険箇所などを把握する。

④緊急事態が起きた場合、冷静に対応できるよう、スタッフ全員がマニュアルについて理解しておく。万が一の場合に備えて、事前に確認し、事故を想定しておく。

⑤救急法・救急処置トレーニングの受講（止血法、心肺蘇生法、ＡＥＤの使用法などの救急処置トレーニング）を、指導者やスタッフは受けておく必要がある。また、防災訓練などへも積極的に参加することが望ましい。

（７）主催者側が用意する用具・装備については、対象者に適しているか、不具合がないかを点検しておく。緊急用の用具・装備、救急箱（応急用の薬など）も用意または手配する。また、使用方法についても熟知しておく。

（８）緊急時の内部連絡、家庭への連絡、警察、消防、病院の連絡先、診療時間などの確認など緊急時のマニュアル、連絡体制をつくる。また、必要な備品を用意するなどしておく。

（９）必要な場合は保険の加入について 傷害保険や賠償責任保険などへの加入が必要である。

（１０）スタッフを含む参加者全員での危険予知を考え話し合う

①危険の発見：「どんな危険が隠れているか」

②特に危険なポイントの発見：「これが危険のポイントだ」

③具体的な対策の検討：「私ならこうする」

④行動目標の決定：「私たちはこうする」

という４つの段階を経て、危険予知および危険回避の能力を高める。外出体験活動中にみられる危険の多くは、日常的に予想される危険とはかなり異なることを認識することが必要である

3 実施段階における安全対策

（１） 気象状況の把握と事業の取り扱いの判断

ア） 警報や注意報が発表されていないかを確認する。

イ） 大雨、暴風、洪水等（特別警報や緊急地震速報を含む）の警報が出ている場合は、野外 での活動は中止・延期する。

ウ） ウ 雷に対する安全対策

〇落雷の予兆 ・積乱雲が成長する様子が見えたら、落雷の危険がある。

・「ゴロゴロ」と雷鳴がかすかにでも聞こえ始めたら、降雨の前に落雷の危険がある。

〇安全な場所への避難 。

・比較的安全な場所は、コンクリートの建物、戸建て住宅、自動車、洞窟の奥などである。

・危険な場所は、テントの中ビーチパラソルの下などであり、それら場所での雨宿りは厳禁である。

エ） 大雨に対する安全対策

〇川の増水と土砂崩れに注意が必要である。常に水位に気をつけ、雨が降っていなくても 水量が増えてきた場合は、活動をやめて避難する。

万が一事故などが発生した場合の対応

1 事故などに対応するために必要なもの

（1） 緊急対策マニュアル

①緊急時の体制について 責任者、指導者、救護、渉外などの役割を決めて、緊急時に対応できる体制を作る。

【緊急時の対応】

事故発生

⇩

周囲の状況と事故の様子の把握（全員）

⇩

管理者に連絡、および各担当への指示・連絡（現地責任者　　）

⇩

指導班の動き

（担当名　　）

＊事故者 以外の
安全確保 ・人数確認

⇩

救護班の動き

（担当名　　）

＊事故者の 救助
＊応急処置 の準備

⇩

渉外班の動き

（ 担当名　　）

＊消防・警察・医療機関
事業所・保護者への連絡
＊事故の記録

⇩

応急処置を施す

⇩

専門医への引き渡し